様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ５ 月 ３１ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０２１３４

研究課題名（和文）十四世紀やまと絵の包括的把握による日本中世絵画史の再構築

研究課題名（英文）Reconstruction of the Japanese Medieval Painting History through the Comprehensive Research on the Fourteenth Century Yamato-e

研究代表者
高岸　輝（Takagishi, Akira）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・准教授

研究者番号：８０４１６２６３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、十四世紀のやまと絵諸作品の調査分析と、文献資料を用いた制作環境の検討を総合することで、中世絵画史の転換の様相を明らかにした。特に、十四世紀前期の花園天皇周辺における肖像画や絵巻受容、中期におけるやまと絵制作工房の再編と古代絵巻の復興、後期における絵巻転写の広がりについて、新たな見解を示した。十四世紀における政治的変革と、画壇の大きな変動の相関関係が、明確になったものと考える。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日本美術史において、十四世紀は一種の空白期であった。それは、この時期の絵画制作の工房や様式、作品注文主に変動が大きく、総合的に把握しにくい状況に起因し、古代的な美術史の流れの上に語られる十三世紀、近世美術への流れで考える十五世紀、との狭間とされてきた。本研究の最大の意義は、十四世紀の複雑な状況を、朝廷や将軍家というパトロン層、土佐派の発生、絵巻の様式変化、といった具体例に即して整理・統合し、見通しを示すことで、前近代日本の美術史を総合的に捉える視点を提供した点にある。

研究成果の概要（英文）：This project examines a key turning point in medieval Japanese painting history by using analyses of various fourteenth century yamato-e paintings and bibliographic sources to conduct a comprehensive investigation into the production background of the time. Notably, this research offers new perspectives on the reception of emaki and portrait paintings in the circle of Emperor Hanazono in the early fourteenth century, the reorganization of yamato-e painting ateliers and resurgence of ancient emaki in the mid-fourteenth century, and the rising trend of copying existing emaki in the late fourteenth century. I think this project will demonstrate the correlation between the political upheavals of the fourteenth century and the sweeping changes in the contemporary artistic milieu.

研究分野：日本美術史

キーワード：十四世紀　やまと絵　朝廷　天皇　絵所　絵巻

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

従来の日本美術史では、十四世紀、特に南北朝時代を総合的に理解する歴史観は構築されてこなかった。たとえば、１９９０年代の講談社版『日本美術全集』は南北朝・室町時代を一括し、２０１０年代の小学館版『日本美術全集』は鎌倉・南北朝時代を一括して扱っており、中世を前半と後半とに分け、南北朝時代をどちらかに包含させるという考え方が主流といえる。しかしながら、前後の時代との相対的な関係性のなかで南北朝の美術を理解することには限界がある。

米倉迪夫氏（『絵は語る４　源頼朝像―沈黙の肖像画』、平凡社、１９９５年）が提起した神護寺三像（「伝源頼朝像」「伝平重盛像」「伝藤原光能像」）の制作時期を十四世紀中期とする説は、そのことを端的に物語っている。米倉説の発表以来、ここ二十年にわたって展開された議論のうち、旧来の鎌倉時代成立説を採る意見の根底には、鎌倉時代を肖像画の黄金期とし、南北朝のそれを末流のものとする強固な枠組みが存在するといえよう。しかし最近では、泉武夫氏（「素材への視線―仏画の絵絹」、『学叢』３４号、２０１２年）が、絵絹の織成の時代的変遷に基づき神護寺三像の制作時期を改めて十四世紀に位置づける画期的見解を発表した。日本の肖像画を代表する大作が十四世紀の成立である可能性が有力となっている現在、肖像画だけでなく、絵巻や大画面仏教絵画など、十四世紀やまと絵を包括的に調査分析し、絵師の活動や流派・工房の実態、さらには注文主についても史料からの追究を行い、この時期の様式観や絵画の制作事情を明確化することが求められる。十四世紀のやまと絵師を扱った文献研究のさきがけとしては、宮島新一「十四世紀における絵所預の系譜」（『美術史』８８号、１９７３年）が重要で、天皇の代替わりと絵所預の交替が連動するという仮説が提起され、同『宮廷画壇史の研究』（至文堂、１９９６年）で修正されつつ継続している。ただし、両統迭立や南北朝並立など王家の複雑な分裂を鑑みれば、絵所絵師それぞれのケースについて再検討の余地は十分にあるだろう。

近年、十四世紀前後のやまと絵を扱った研究は、ジャンルごとに急速な進展を見せている。鎌倉時代の肖像画に関しては、伊藤大輔氏（『肖像画の時代』、名古屋大学出版会、２０１１年）による再整理が試みられ、障屏画など大画面については泉万里氏（『中世屏風絵研究』、中央公論美術出版、２０１３年）が鎌倉から室町時代を見渡す新たな枠組みを提示している。また、最近まで等閑視されてきた掛幅縁起絵をはじめとする大画面仏教説話画については、佐野みどり氏（「中世掛幅縁起絵序説―二重の時間・二重の空間」、佐野みどり・新川哲雄・藤原重雄編『中世絵画のマトリックス』、青簡舎、２０１０年）や加須屋誠氏（「笠置曼荼羅図小論」中野玄三・加須屋誠・上川通夫編『方法としての仏教文化史』、勉誠出版、２０１０年）が現存作品の分析を通じた先駆的な研究方法の見通しを示している。これまでに申請者も、十四世紀を含む中世絵巻の包括的展望のほか、作品研究として「後三年合戦絵巻」ほか合戦絵巻の分析、「十界図屏風」、絵師研究として高階隆兼や藤原行光に関する考察を蓄積している。本研究では、最新の動向を踏まえ、多分野からの考察を融合させることで、十四世紀やまと絵の総合的理解を目指す。

２．研究の目的

日本美術史における南北朝時代（１３３３～９２）は、中世の前期と後期を結節し、古代を継承する鎌倉時代の美術と、近世への萌芽を示す室町時代の美術との転換期として重要である。本研究は、十四世紀に着目して鎌倉末期から室町初頭までを視野に入れ、この時期のやまと絵作品の調査・分析と、絵師の職制に関する文献的考察を行うことで、新旧の様式や制度の連続面と分断面を明確化することを目的とする。主たる調査対象作品を、絵巻・肖像画・大画面仏教絵画の三群に絞り、ここに高階隆兼以降の絵所預の絵師たちに関する考証、および朝廷・幕府・寺院など注文主の動向を重層させることによって、立体的な中世絵画史の把握へとつなげる。

３．研究の方法

十四世紀の絵巻・肖像画・大画面仏教絵画に関する作品調査を通じた様式展開の分析と、日記・記録・寺院文書に基づく絵師の活動と注文主の動向についての検討とを並行して進める。朝廷・足利将軍家・有力寺院などの注文主の属性ごとに作品をグループ化し、これらを横断しつつ活動する絵師の活動を史料から追うことで、十四世紀やまと絵の全貌が俯瞰できるだろう。

４．研究成果

本研究は、十四世紀のやまと絵諸作品の調査分析と、文献資料を用いた制作環境の検討を総合することで、中世絵画史の転換の様相を明らかにした。特に、十四世紀前期の花園天皇周辺における肖像画や絵巻受容、中期におけるやまと絵制作工房の再編と古代絵巻の復興、後期における絵巻転写の広がりについて、新たな見解を示した。十四世紀における政治的変革と、画壇の大きな変動の相関関係が、明確になったものと考える。

具体的な成果は、下記に挙げたとおりである。このうち特に重要なものは〔雑誌論文〕6、〔図書〕3、であり、中世朝廷における絵画制作と受容の問題を包括的に分析した。十三世紀に始まる両統迭立から、南北朝分裂、そして室町期に入る時期までの関連する文献史料、作品を渉猟し、画壇や絵師の消長、絵画の様式展開を詳細に論じた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 6 件）

1. The Reproduction of Engi and Memorial Offerings: Multiple Generations of the Ashikaga Shoguns and The Yūzū nenbutsu engi emaki, Japanese Journal of Religious Studies 42-1, Nanzan Institute for Religion and Culture, 157～182 頁, 2015 年
2.「中世の絵師と絵巻」、『日本文学論究』75 冊、國學院大學国文学会、6～9 頁、2016 年
3.「室町土佐派と縁起絵巻の再生」、『聚美』19 号、聚美社、9～31 頁、2016 年
4.「土佐雅楽助国綱兄弟筆 涅槃図」、『國華』1458 号、國華社、54～56 頁、2017 年
5.「やまと絵屏風の変容―室町から桃山へ」、『聚美』26 号、聚美社、48～65 頁、2018 年
6.「蒙古的衝擊―花園天皇與十四世紀的日本繪畫」、『國立臺灣大學美術史研究集刊』44 期、國立臺灣大學、83～98 頁、2018 年

〔学会発表〕（計 13 件）

1. Emaki Studies in Japanese Art History, 2015 Spring AHAK Conference: Art History in Korea in the Age of Asia, Art History Association of Korea (AHAK), Seoul National University, Seoul, Korea, 2015 年 5 月 9 日
2.「中世の絵師と絵巻」、國學院大學国文学会秋期大会シンポジウム「文化史の中世―文学史をとりまく武具史・絵画史・書道史―」、國學院大學、2015 年 11 月 28 日
3.「室町時代の縁起絵巻にみる古典復興の諸相」、古典知研究会、学習院大学、2016 年 1 月 10 日
4.「矢代幸雄の絵巻研究」、矢代幸雄研究会、東京文化財研究所、2016 年 1 月 13 日
5.「日本中世絵画にみる風景観・国土観・世界観」、シンポジウム「フレームの超域文化学Ⅱ 世界認識と古典知」、学習院大学、2016 年 8 月 1 日
6. Understanding Japanese Art History through the lens of the Kanmon Nikki (Keynote Lecture), Workshop: Things Seen and Heard in Medieval Japan: Reading and Interpreting the Fifteenth Century Diary Kanmon nikki, Heidelberg University, Heidelberg, Germany, 2016 年 10 月 3 日
7.「モンゴルの衝撃―花園天皇と十四世紀の日本絵画」、蒙元與中亞、東亞之藝術交流學術工作坊、中央研究院歴史語言研究所、台北、台湾、2016 年 12 月 9 日
8. Japanese Narrative Handscrolls (Emaki): Emperors, Shoguns, and Landscapes, Burke Center for Japanese Art, Columbia University, New York, U.S.A., 2017 年 4 月 20 日
9.「日本美術史における国際化とその更新」、東方学会創立 70 周年記念大会シンポジウム「東方からの東方学―その多様性と可能性―」、東京大学山上会館大会議室、2017 年 6 月 17 日
10.「「後三年合戦絵巻」の変貌―古代から近代まで―」、「東京大学駒場博物館所蔵第一高等学校絵画資料修復記念 知られざる明治期日本画と「一高」の倫理・歴史教育」展 記念シンポジウム、東京大学駒場博物館、2017 年 12 月 2 日
11.「戦国時代における霊場歴覧と縁起・勧進・絵画」、第 71 回 美術史学会全国大会 シンポジウム「聖地巡礼」、東北大学川内萩ホール、2018 年 5 月 19 日
12.「フリーア美術館所蔵「槻峯寺建立修行縁起絵巻」とともに歩んだ２０年の旅（１９９８～２０１９）」（基調講演）、JSPS グローバル展開プログラム「絵ものがたりメディア文化遺産の普遍的価値の国際共同研究による探求と発信」国際ワークショップ、フリーア美術館（米国ワシントン DC）、2019 年 3 月 18 日
13.「１７世紀における中世絵巻の再生」、シンポジウム「『舞の本』と華麗なる江戸絵巻・絵本の世界」、海の見える杜美術館、2019 年 4 月 13 日

〔図書〕（計 7 件）

1.「大覚寺縁起絵巻を読み解く」、『尼崎市制 100 周年記念 新「尼崎市史」 たどる調べる 尼崎の歴史 下巻』、尼崎市、49～54 頁、2016 年
2.「絵巻マニアの絵巻評」、『絵巻マニア列伝』、展覧会図録、サントリー美術館、178～187 頁、2017 年
3.『天皇の美術史 第３巻 乱世の王権と美術戦略』（編著、編集委員）、吉川弘文館、1～230 頁（執筆担当 1～110 頁）、2017 年
4.「「病草紙」の構図」、加須屋誠・山本聡美編『病草紙』、中央公論美術出版、187～199 頁、2017 年
5.「「道成寺縁起」の成立圏―湯河氏と南都絵所の関与をめぐって」、『道成寺と日高川―道成寺縁起と流域の宗教文化―』、展覧会図録、和歌山県立博物館、174～182 頁、2017 年
6.「『看聞日記』にみる唐絵の鑑定と評価」、出口久徳編『日本文学の展望を拓く 第２巻 絵画・イメージの回廊』、笠間書院、132～141 頁、2017 年
7.「室町・戦国時代の西湖憧憬―旅する眼に映った日本の「西湖」」、『西湖憧憬―西湖梅をめぐる禅僧の交流と十五世紀の東国文化―』、展覧会図録、神奈川県立金沢文庫、99～105 頁、2018 年

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし
６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。